

学級担任の指導による体育授業の成果に関する検討 —小学校6年生体づくり運動—

佐々木 浩

キーワード：リズム体操、体づくり運動、教科担任制、体育授業

I. 緒言

小学校高学年における教科担任制については、中央教育審議会が、2021年3月に「令和4（2022）年度を目途に本格的に導入する必要がある」と答申した（文部科学省,2021a）。答申では、各教科等の学習が高度化する小学校高学年では、日常の事象や身近な事柄に基礎を置いて学習を進める小学校における学習指導の特長を生かしながら、中学校以上のより抽象的で高度な学習を見通し、系統的な指導による中学校への円滑な接続を図ることが求められるとしている。また、多様な子供一人一人の資質・能力の育成に向けた個別最適な学びを実現する観点からは、GIGA スクール構想による「1人1台端末」環境下でのICTの効果的な活用とあいまって、個々の児童生徒の学習状況を把握し、教科指導の専門性を持った教師によるきめ細かな指導を可能とする教科担任制の導入により、授業の質の向上を図り、児童一人一人の学習内容の理解度・定着度の向上と学びの高度化を図ることが重要であるとし、その必要性を述べている（文部科学省,2021a）。

その後、この答申を踏まえ、文部科学省の検討会議（義務教育9年間を見通した指導体制の在り方等に関する検討会議）が、2021年7月に、令和4（2022）年度予算の概算要求を見据えて「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について（報告）」を公表した。この報告では、中央教育審議会での整理を踏まえ、教師の負担軽減を図りつつ、新学習指導要領に示された資質・能力の育成に向けて義務教育9年間を見通した指導体制を構築するため、改めて小学校高学年からの教科担任制を推進する必要があるとされた。また、優先的に専科指導の対象とすべき教科としては、先の答申に体育が加えられ、外国語、理科、算数及び体育の4教科とされた。（文部科学省,2021b）。

そして、2021年12月に政府は、2022年度から始まる小学校高学年の一部教科担任制について、文部科学省と財務省の折衝の結果、950人の教員の増員を決定した。当初、文部科学省の概算要求では、来年度2,000人、4年間で8,000人の定数改善の要求であったが、小規模中学校教員を活用したり、中・大規模小学校において教員同士の授業交換を実施したりすることで対応し、増員幅が圧縮された形となった（文部科学省,2021c）。

しかし、中学校教員の小学校への派遣や教員同士の授業交換を円滑にかつ効果的に実施するためには、時間割の調整や小・中連携など入念な打ち合わせが欠かせない。したがって、専科教員としての加配措置が十分に実施されるまでは、小学校高学年における教科担任制の効果的、かつ効率的な実施運営は、地域や学校の実情にもよるが課題も多くみられることが推測され、暫くは学級担任における授業実践との並行実施が予想される。

そこで本研究では、並行実施が予想される学級担任による体育授業の成果を、小学校6年生の体づくり運動の授業において、子どもによる授業評価と教師の相互作用行動、並びに授業後の教師へのインタビューから分析することにより明らかにすることを目的とした。本研究により学級担任による体育授業の成果の特徴が確かめられれば、今後専科教員が実施する体育授業の指導法に関しての、効果的な知見が得られるものと考ええる。

II. 研究方法

1. 対象と期日及び授業者

- 対象：A市立B小学校6年生1学級（30名）

- 期日：2021年10月25日～11月4日
- 授業者：本授業学級担任，教職経験11年目，校務分掌・体育主任

2. 教材について

○「リズム体操」（体づくり運動：体の動きを高める運動）5時間扱い（表1）

高学年体づくり運動領域内の「体の動きを高める運動」では，体の動きを高めることによって直接的に体力の向上をねらいとするが，児童が必要感のないまま運動を繰り返す活動にならないよう留意し，自己の課題を持ち楽しく運動を行いながら体の動きを高めることが重要であるとされている（文部科学省，2018）。そこで，テンポの良い音楽に合わせて楽しみながら運動を行うことにより，全身のなりズミカルなよい動きを習得するよう計画を立てた（佐々木，2009）。

- オリエンテーション：事前に教師が創作した基本的な動きで構成された「はじめのやさしい動き」をひとまとまりの体操として学習する。
- 単元前半「基本学習」：グループ内で一人一つの動きをつくり，グループ内でそれぞれ組み合わせていく。
- 単元後半「発展学習」：グループでつくった動きを一連の体操として高めていく。
- 使用曲：WANIMAの「やってみよう」インストルメンタルバージョン（BPM＝129.4）。

○単元の目標

- 知識及び運動

体づくり運動の行い方を理解するとともに，体を動かす心地よさを味わったり，体の動きを高めたりすることができるようにする。

- 思考力，判断力，表現力等

自己の体の状態や体力に応じて，運動の行い方を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

- 学びに向かう力，人間性等

運動に積極的に取り組み，約束を守り助け合って運動をしたり，仲間の考えや取組を認めたり，場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

表1 単元の計画について

時間	1	2	3,4	5
ねらい	学習の流れと初めの易しい動きを知ろう	一人一つの動きをつくり，グループ全員で合わせよう	グループ後ことに一連の体操を工夫し，よりよい動きに高めよう	創り上げた体操を発表しよう
指導の内容	・グルーピング ・学習方法	・動きの選択及び創作 ・動きのポイント	・演技構成 ・動きのポイント ・協力体制	・動きの確認 ・発表会
学習過程	1 集合・整列・挨拶・健康観察 2 準備運動 3 めあての確認			
	4 オリエンテーション ・学習のねらいと進め方を知り，単元の見通しを持つ。 ・グルーピングをしはじめのやさしい動きと方法を知る。 ・学習カードの使い方を知る。 ・学習のねらいと進め方を知り，単元の見通しを持つ。 ・グルーピングをしはじめのやさしい動きと方法を知る。 ・学習カードの使い方を知る。	4 基本学習 ・音楽や基本の動きを手がかりに一人一つの動きを考える。 ・グループで合わせる。 ・ペアグループで見合う。	4 発展学習 ・動きや隊形等を工夫し動きを高める。 ・一連の体操を音楽に合わせて滑らかに連続できるよう動きを高める。 ・ペアグループで見合い高め合う。	4 まとめ ・グループ毎に成果を確かめる。 ・リズム体操の発表をする。 ・体力の伸びを評価し，単元のまとめをする。 ・今後の生活に生かすようにする。
	5 整理運動 6 振り返り 7 挨拶			
	知・技 ①観察・学習カード	②観察・学習カード	/ ②観察学習カード	①観察・学習カード
評価計画	思・判・表 ①観察・学習カード		①観察・学習カード / ②観察・学習カード	
	態 ①観察・学習カード	7	②観察・学習カード /	①観察・学習カード

3. 授業成果

○子どもによる授業評価

● 診断的・総括的評価

単元の最初と最後に高橋ほか（2003）が開発した「診断的・総括的評価」を適用し、質問紙法により実施した。

● 形成的授業評価

毎時間終了後に、同じく高橋ほか（2003）が開発した「形成的授業評価」を適用し、質問紙法により実施した。

○教師の相互作用行動

授業中にワイヤレスマイクで録音された教師の発話内容と録画された教師の行動を、高橋ほか（2003）によって開発された教師の相互作用行動観察カテゴリーにあてはめて、発話内容及び行動より教師の相互作用行動の頻度を分析した。

○インタビューデータの収集

授業者がどのような態度で授業に取り組んできたのか、また、その取り組みからどのような成果を得たと考えたのかという点について明らかにするために、単元終了後にインタビューを実施した。

4. 統計処理

「診断的・総括的評価」の各群の平均値の比較には、対応のある t 検定を行った。分析には、Microsoft Excel2016 を用いた。なお、有意水準はいずれも 5% 未満とした。

III. 結果と考察

○子どもによる授業評価

1. 「診断的・総括的授業評価」

単元前の診断的授業評価の総合評価得点は 54.38 ($SD: 4.13, N = 29$) であり、単元後の総括的授業評価の総合評価得点は 54.79 ($SD: 5.12, N = 29$) となった。単元後の総合評価得点が 0.41 ポイント向上する結果となったが、その伸びに有意差は見られなかった ($t(28) = 0.78, ns$)。しかし、単元後では、総合評価を含めすべての因子で“+”の評価となった。したがって、単元後の児童が、全ての因子に対して主観的に高い評価を下していることから、学級担任の指導における本単元のリズム体操の授業は、児童に一定の学習成果を保障することができたと推察することができる（表2）。

特に「まなぶ」（認識目標）因子に着目すると、単元前の診断的授業評価得点は 12.93 ($SD: 1.66, N = 29$) であったが、単元後の総括的授業評価得点は 13.41 ($SD: 1.63, N = 29$) となり、単元後の評価得点に 0.48 ポイントの向上が見られた。さらに、統計処理の結果、0.1% 水準で有意差が確認できた ($t(28) = 3.14, p < .01$)。このことは、学級担任の指導の下、児童は単元を通してグループ内で体操を創り上げていく過程で共に学びあいを深めていったことが考えられ、「まなぶ」（認識目標）の因子が有意に向上したものと推察することができる（表2）。

表2 診断的・総括的授業評価の結果

項目名		単元前			単元後			得点の 伸び	t	p
		M	SD	評価	M	SD	評価			
Q1	楽しく勉強	2.97	0.18		2.97	0.18		0.00	0.00	1.00
Q2	明るい雰囲気	2.93	0.36		2.83	0.53		-0.10	1.36	0.18
Q3	丈夫な体	2.79	0.41		2.83	0.53		0.03	0.37	0.71
Q4	精一杯の運動	2.93	0.25		2.93	0.25		0.00	0.00	1.00
Q5	心理的充足	2.76	0.50		2.66	0.66		-0.10	0.90	0.37
たのしむ(情意目標)		14.38	1.03	+	14.21	1.65	+	-0.17	0.69	0.49
Q6	工夫して勉強	2.72	0.52		2.79	0.48		0.07	0.70	0.49
Q7	他人を参考	2.72	0.52		2.86	0.43		0.14	1.68	0.10
Q8	めあてを持つ	2.72	0.52		2.83	0.46		0.10	1.36	0.18
Q9	時間外練習	1.86	0.78		1.97	0.85		0.10	0.83	0.41
Q10	友人・先生の励まし	2.90	0.30		2.97	0.18		0.07	1.00	0.33
まなぶ(認識目標)		12.93	1.66	+	13.41	1.63	+	0.48	3.14	0.004**
Q11	運動の有能感	2.14	0.78		2.10	0.80		-0.03	0.57	0.57
Q12	できる自信	2.28	0.78		2.45	0.72		0.17	1.15	0.26
Q13	自発的運動	2.66	0.54		2.62	0.55		-0.03	0.30	0.77
Q14	授業前の気持ち	2.34	0.60		2.48	0.62		0.14	1.28	0.21
Q15	いろいろの運動の上達	2.66	0.60		2.72	0.64		0.07	0.70	0.49
できる(運動目標)		12.07	2.35	0	12.38	2.27	+	0.31	1.22	0.23
Q16	自分勝手	3.00	0.00		2.93	0.25		-0.07	1.44	0.16
Q17	約束ごとを守る	3.00	0.00		2.97	0.18		-0.03	1.00	0.33
Q18	先生の話聞く	3.00	0.00		2.97	0.18		-0.03	1.00	0.33
Q19	ルールを守る	3.00	0.00		2.97	0.18		-0.03	1.00	0.33
Q20	勝つための手段	3.00	0.00		2.97	0.18		-0.03	1.00	0.33
まもる(社会的行動目標)		15.00	0.00	+	14.79	0.92	+	-0.21	1.18	0.25
総合評価		54.38	4.13	+	54.79	5.12	+	0.41	0.78	0.44

(**p<.01)

2. 「形成的授業評価」

表3 形成的授業評価の結果

	成果	評価	意欲・ 関心	評価	学び方	評価	協力	評価	総合 評価	評価
1時間目	2.39	3	2.86	4	2.52	3	2.31	2	2.51	3
2時間目	2.57	4	2.93	4	2.90	5	2.88	5	2.79	5
3時間目	2.56	4	2.97	4	2.71	4	2.88	5	2.75	4
4時間目	2.64	4	2.91	4	2.78	4	2.87	5	2.78	5
5時間目	2.77	5	2.93	4	2.92	5	2.95	5	2.88	5

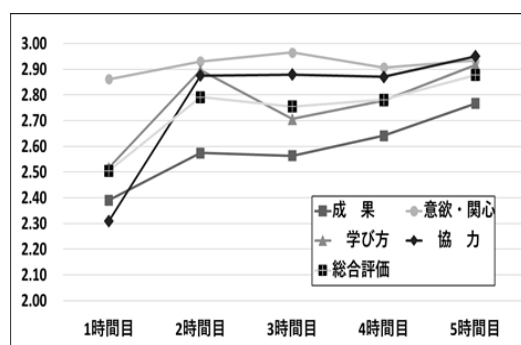


図1 形成的授業評価の推移

総合評価得点を見てみると、1時間目は2.51(評価3)であったが、その後向上が見られ高い得点を維持しながら、最終5時間目には2.88となり、5段階診断基準の「5」を記録した。このように形成的授業評価においても、児童は総合的に高い評価を下しており、本単元は、児童に一定の学習成果を保障することが

できたと推察することができる（表3、図1）。

因子別にみると、「協力」因子においてその得点に顕著な向上が見られる。単元1時間目こそ、評価得点は2.31（単元中、全時間の全因子で最も低い得点）であったが、学習を重ねていくにつれて評価は高まり、最終5時間目には2.95となり全時間の全因子の中でも最も高い評価を得ることとなった。このことから、リズム体操を創り上げていく過程での児童のグループ活動が、学級担任の指導の下肯定的に構築されていったものと推察することができる（表3、図1）。

○教師の相互作用行動

単元を通して、教師の相互作用行動における指導言葉を場面ごとにカウントした結果が表5である。これによると、1時間目のオリエンテーションは教材に関するインストラクションが学びの中核であったため少ない結果となったが、2時間目以降は合計が120回を優に超え、子どもたちに積極的にかかわった授業が展開されたことが推察できる。その中でも、特に具体的矯正カテゴリーのフィードバック行動が突出しており、単元の中で教師が積極的に子どもたちの技能向上に向けて関わっていたことが分かる（表4）。

また、これらの相互作用行動を「個人」と「集団」に分けて集計してみると、「集団」に対して多く関わっていたことが見て取れる（表5）。このことから、学級担任である授業者は、グループで創る一連の体操のパフォーマンス向上に重点を置いて指導していたことが推察できる。

表4 教師の相互作用行動①

		第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	平均	SD
発問		11	7	11	13	7	9.8	2.683
肯定	一般	0	9	14	31	13	13.4	11.28
	具体	6	12	10	40	35	20.6	15.68
矯正	一般	1	0	0	0	0	0.2	0.447
	具体	4	88	91	106	79	73.6	40.1
否定	一般	0	0	0	0	0	0	0
	具体	0	1	0	0	0	0.2	0.447
励まし		1	5	4	4	2	3.2	1.643
合計		23	122	130	194	136	121	61.73

表5 教師の相互作用行動②

単元時間		1		2		3		4		5	
相互作用行動		個人	集団	個人	集団	個人	集団	個人	集団	個人	集団
発問		0	11	0	7	1	10	3	10	0	7
肯定	一般	0	0	1	8	4	10	17	14	5	8
	具体	5	1	1	11	4	6	25	15	11	24
矯正	一般	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	具体	3	1	15	73	17	74	47	59	16	63
否定	一般	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	具体	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
励まし		0	1	2	3	0	4	2	2	2	0
合計		8	15	20	102	26	104	94	100	34	102

○インタビューデータの収集

授業者がどのような思いで授業に取り組んだのか、単元終了後にインタビューを実施した（表6）。

質問1の「日頃の体育の授業で大切にしていることは何ですか」という問いに対しては、教える側の授業者を含め学級全体で楽しく体育の授業を実践できる雰囲気づくりを一番に答えていた。そして、そのために日頃から関わりを多くして学級経営を大切にしているとのことであった。具体的には児童理解の重要性として児童との関係づくりを、声掛けを多くすることにより肯定的に構築できるよう気を付けているとのことであった。また、他の教科と同様に授業のねらいを外さないように常に意識しているとし、授業成果も大切にしていると答えていた。このことは、質問4の「本授業で大切に考えていたこと」の回答に、楽しくできるよう雰囲気づくりを大切にしていたとあるように、常に心掛けている点であることが分かる。このことから、本授業者が、学級担任として学級集団の育成に重きを置いていることが推察できる。

一方で、質問5の本授業で大変だったことの問いに対しては、運動パフォーマンスの評価関連について回答しており、子どもたちの技能の伸びについても単元を通して心がけていたことも分かる。

表6 授業者の単元後のインタビュー

質問1：日頃の体育の授業で大切にしていることは何ですか？
● 雰囲気です。授業者がまず楽しく行うこと。授業が楽しくなる全体の雰囲気を大切にしている。 ● 日頃から学級経営・児童理解を大切に授業に生かしている。 ● 日頃より関わりを多くして、関係づくりを大切にしている。子どもたちへの声掛けを多くするようにしている。 ● 授業のねらいを外さないよう常に意識している。
質問2：体育の授業を通してどんな子供たちを育てたいですか？
● 運動好きな子を育てたい。
質問3：本授業実施後の感想は？
● 授業を実践していて楽しかった。 ● 日頃体づくり運動は何をやるか教材づくりに苦労していたが、この授業はシンプルでわかりやすいが、幅が広くて楽しかった。
質問4：本授業で大切に考えていたことは？
● 楽しくできるよう雰囲気づくりを大切にしていた。 ● 子どもたちの動きを否定しないよう、肯定的な声掛けを意識していた。
質問5：本授業で大変だったことは？
● 動きの高まりの評価はどうしたらよいのか、子どもたちの動きの伸びの評価の仕方が難しかった。 ● 数値化できるとわかりやすくてよかった。

IV. 摘要

学級担任による体育授業の授業成果を明らかにするために、担任の指導による小学校6年生の体づくり運動の授業成果を、子どもによる授業評価と教師の相互作用行動、並びに授業後の教師へのインタビューから分析した。その結果、次の諸点が明らかになった。

- ① 子どもによる授業評価のうち、診断的・総括的授業評価では、単元後の全ての因子において高い評価を得ることができた。特に、「まなぶ」（認識目標）因子に関しては、0.48ポイントの向上が見られ、0.1%水準で有意差が確認できた。これらのことから、本単元の授業は、児童に一定の学習成果を保障することができたといえる。また、「まなぶ」（認識目標）の因子が有意に向上したことから、学級担任の指導

における本授業は、グループにおける集団での活動が、効果的な学びの深まりにつながったと推察できる。

- ② 同じく、形成的授業評価では、総合評価（全体平均）が、1時間目は2.51（評価3）であったが、その後向上が見られ高い得点を維持しながら、最終5時間目には2.88となり、5段階診断基準の「5」を記録した。特に、「協力」因子は、単元1時間目は2.31と全時間全因子中最も低い値であったが、学習を重ねていくにつれて評価が高まり、最終5時間目には2.95と全時間全因子中最も高い値を得ることとなった。これらのことから、学級担任の指導による本授業は、一定の学習成果を保障することができたといえ、さらには、リズム体操を創り上げていく学習過程で、集団での学び合いが肯定的に構築されていったものと考えられる。
- ③ 教師の相互作用行動は頻繁に営まれ、特に、集団に対する具体的矯正カテゴリーのフィードバック行動が突出していた。深見ら（1997）は、教師のフィードバック行動が頻繁に営まれることにより、授業全般に肯定的な雰囲気が生み出され、子どもによる形成的授業評価の平均得点も高くなることを明らかにしている。学級担任の指導による本授業でも、集団に対する頻繁なフィードバック行動により、子どもの総合的な授業評価と、集団での活動である「まなぶ」と「協力」の因子が高まったことから、先行研究が裏付けられる結果となった。
- ④ 授業後の教師へのインタビューからは、学級担任である授業者は、授業全体の雰囲気を大切にしていることが伺われ、日頃からの関わりから学級集団全体を常に意識していることが分かった。特に、子どもたちへの声掛けを重視しており、運動好きな子どもたちの育成を心がけていることが分かる。くわえて、授業のねらいも常に意識し、動きの高まりも求めていることが分かった。

以上を総合して考えると、本単元における体育授業において、指導者である学級担任は、集団での学び合いを通して動きの高まりを求めるとともに、学級集団全体の育成を大切にしていることが明らかとなった。また、その際、集団への教師の相互作用行動が頻繁に営まれることにより、子どもから高い授業評価を得られ、一定の学習成果が保障されることが証明された。

2022年度より、小学校高学年の一部教科担任制が始まった。しかし、学校規模や地理的条件に応じた教職員の配置には違いが見られることや、小・中連携等環境整備が重要になり、管理職のマネジメント力に影響を受けることが推察される。また、文部科学省も、学級担任が原則として全ての教科を教えることにより、教科横断的なカリキュラム・マネジメントが効果的に行われてきたという利点が損なわれることのないよう、組織的・教科等横断的な教育課程の編成・実施が可能となるよう留意する必要があるとしている。

そこで、今回本研究により明らかとなった学級担任による体育授業の利点である、日頃からの関わりの多さから子どもたちへの具体的で有効なフィードバック行動や、学級担任特有の広い視野からの学級集団全体の育成、これらの要素を、今後教科担任制の導入の広がりが予想される中、教科担任制のメリットとして言われている、子どもたちの学習内容の理解度・定着度の向上と学びの高度化と合わせて、質の高い授業が展開されることを期待したい。

小学校における教科担任制の導入は、教師の持ちコマ数の軽減や授業準備の効率化による学校教育活動の充実や教師の負担軽減に資するといわれている。また、合わせて授業の質の向上はもちろんのこと、小・中学校間の円滑な接続、多面的な児童理解の実現とメリットが整理されている。文部科学省からも、2023年に「小学校高学年における教科担任制に関する事例集～小学校教育の活性化に繋げるために～」が公開され、教科担任制の取組の推進に力を入れている。したがって今後も、学級担任による体育授業の利点を生かした専科教員によるよりよい体育授業の指導法について、示唆を与えられるような実践的な研究を深めていきたい。

〈文献〉

- 1) 深見英一郎、高橋健夫、日野克博、吉野聡（1997）、体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討：特に、

- 子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に. 体育学研究: 42, 167-179.
- 2) 文部科学省 (2018), 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編. 東洋館出版社: 東京. p.116.
 - 3) 文部科学省 (2021a), 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～. 中央教育審議会令和 3 年 1 月 26 日答申. pp.44-45.
 - 4) 文部科学省 (2021b), 義務教育 9 年間を見通した教科担任制の在り方について (報告). 義務教育 9 年間を見通した指導体制の在り方等に関する検討会議令和 3 年 7 月報告
 - 5) 文部科学省 (2021c), 末松信介文部科学大臣記者会見録－予算－ (令和 3 年 12 月 22 日). https://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/mext_00220.html (2022 年 1 月 27 日閲覧)
 - 6) 文部科学省 (2023), 小学校高学年における教科担任制に関する事例集～小学校教育の活性化に繋げるために～. https://www.mext.go.jp/content/20230310-mext_zaimu-000027939_1.pdf (2024 年 9 月 25 日閲覧)
 - 7) 佐々木浩 (2009), 「表現」と「記録の達成」を取り入れた体づくり運動の授業. 新しい体づくり運動の授業づくり. 体育科教育別冊. 大修館書店: 東京. pp.112-115.
 - 8) 佐々木浩 (2022), 小学校高学年におけるリズム体操に関する実践的研究－体づくり運動領域の定型教材としての可能性の検討－. 初等教育論集 (23). 65-77.
 - 9) 高橋健夫 (2003), 体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－. 明和出版. pp.12-15. pp.49-52.